

思い立ったが吉日

2022 年春、無性に縄文杉に逢いたくなった。

「いつか、そのうちに、一度行ってみよう」としか思っていなかったのであるが、何故か急に、今行っておかなければ、終ぞ行けなくなる様な気がした。

予てより、仕事をリタイア後、世界一周航空券を確保して、女房とのんびり ご所望の旅に出ようなどと目論んでいたものの、コロナ禍は収まらず、円安も進行、おまけにプーチンのロシアがウクライナに侵略戦争をはじめて、全く渡航の見通しが立たなくなっていた。

今後、これに輪をかける様にエネルギーと食料不足、インフレと不況が加速し、地球温暖化による気候変動と、その他の人為に相乗する環境破壊とによって、人類の未来が見えなくなるかも知れない。

— そんな漠然とした不安を抱きつつあった時、— 過酷な環境の変化や風雪に耐え、強かに淡々と、0.2 mmあまりの年輪を地味でも着実に刻み、なんと推定 7,200 年を生き抜いてきた縄文杉のパワーに肖りたいと強く思ったのである。

早速、ヒコーキの便を取り、宿を確保した。

いざ屋久島へ

2022 年 4 月 18 日、朝 5 時半、4 泊 5 日の行程で妻と地元、町田を発った。

羽田発 9 時 30 分の便で鹿児島空港へ、そこで双発の小型プロペラ機にトランジット、屋久島空港に着いたのは 11 時過ぎ、感覚的には うんと遠いところのイメージが強かったが、着いてみれば何と半日の旅だった。

フェリーを使えば 1 日仕事になる様だが、料金は殆ど同じだから、予約に難があっても空路がベストだろう。ただ、天候不順による欠航リスクはどちらも多い様だ。

屋久島というところ

屋久島に降り立つと、先ず独特な香りに包まれていることに気が付いた。この匂いには、直ぐに慣らされてしまうのだが、島中の海岸線を埋め尽くしている常緑樹、シイノキ(スダジイ)の花の匂いではないか。匂いは栗の花にも似ているが、深い森を感じさせる芳しさである。山麓のいたるところに、薄黄緑色の花が点々と見える。

予約していたレンタカー屋のおばちゃんが、小さな空港のロビーで黄色い旗を掲げて待っていてくれた。

このレンタカー、島のスケール感や交通に疎かった我々には大いに役に立った。

路線バスはあるが便が少ない。タクシーはあるが完全予約制で高額。— レンタカー予約していて正解だった。この軽自動車無しには、島での効率的な移動は不可能であった。

また、この島、想像以上に大きかった。車で外周道路を 観光がてら一巡りするだけで、何とゆうに半日を要した。

比較的巨大なこの島は、海岸線から 300m の緩傾斜の沿岸部を登ると直ぐに地元の裏山

につながる。それぞれの集落に、その名を冠する地元の裏山が聳えて居る。標高 500～1,000m程度までありそうである。

ちょうど丹沢主稜やハケ岳主稜を、麓 300m 残して海に沈めた様な地形とスケールだ。

島の縁側の内は山また山、最近で言えば映画ジェラシックパークの島、我々世代の感覚だとモスラかキングコングの火山島を彷彿とさせる。



世話好きそうなレンタカー屋のおばちゃん曰く、「島のメイン道路は 3 本、外周道路と白谷雲水峡に入る白谷林道、そして縄文杉、宮之浦岳への登山口に至る安房・荒川林道のみ。

それ以外の道路は、山で行き止まりの集落の私道だから気を付けて！ それに島では側溝の蓋が無いから脱輪に注意!!」と。

4 泊お世話になる屋久島空港から徒歩 5 分の宿、ペンション「^{いちごいちえ}莓一会」へのチェックインまで、未だ時間があったので、先ず安房で名物のトビウオ料理の昼食をすませ、島の外周を一周偵察してみることにした。

碧く美しい海と険しい南国の山岳、どこかハワイ島を彷彿とさせる山麓は常緑照葉樹の深い森だ。

レンタカー屋のおばちゃん推奨の、反時計回りで外周道路を廻る。安房⇒空港⇒宮之浦⇒種子島や口永良部の島影を望みながら永田のウミガメ産卵地⇒屋久猿・屋久鹿のパラダイスである世界自然遺産地域ロードの西部林道⇒大川の滝⇒千尋の滝⇒空港周辺⇒宿で日が暮れてしまった。

西部林道は、サル・サル・サル・シカ・シカ・サル・シカ・シカと止めどなく道路に出てくる。出て来ると言うより彼らは路上を生活圏にしている様だ。極めてリラックスして悠々と寝そべっている。当然、車は最徐行で進むサファリパークだ。



ヤクザル



ヤクシカ

巨大な2つの滝の名所では、この島が一塊の巨大な花崗岩で出来ていると感じさせる。海岸線から中心部の標高 1,936m の宮之浦岳までの水平距離は約 15km。15km で 2,000m 登る急峻な地形に、本州の多雨地域の倍の年間 8,000mm 以上の雨が降る。黒潮の暖流がもたらす湿った空気が、屋久島の山地で一気に冷却され多量の雨を降らせる。我々の滞在中も半分は雨だった。

短いサイクルで大量の水循環が行われていると言って良い。だからこの島は水に恵まれている。焼酎の名酒「三岳」「愛子」「屋久の島」などを産する屋久の名水に である。



大川の滝



千尋の滝



鈴川の滝

風化した花崗岩を母材とする砂の様な土壌、いわゆる関西にも多い「真砂土」は、火山灰を母材とするローム「赤土」と比べて、ただでさえ養分を蓄積し難い。それは、腐植を吸着する細かな土粒子のコロイド状の結合「団粒構造」が無いためである。

さらに屋久島のように雨量が多くなると、土壌中の養分はなおさら溶脱され流失する。

そうならば自ずと植物の成長は遅く、食物連鎖を支える餌の量は限られる。そして、奄美から冬に冠雪する北海道までの垂直気候を 一島に有する厳しい環境下で、この島の野生動植物は育まれて来たのである。

ボス猿以外のサルやシカは、本州で見るものに比べどれも小振りである。

宿に到着する前に、空港前にある観光案内所に立ち寄り、翌日からの入山のための山岳部環境保全協力金 1,000 円を杉製の入山証と引換えに納め、マイカー規制がある、屋久杉自然館前から荒川登山口までの登山バスのチケットを予め購入した。

7,200 歳舐めたらあかんかった

到着初日をのんびりと過ごした翌朝 4 時、愈々 7,200 歳に逢いに宿を出発した。

1 日おきの雨が予報されていたが、案の定、早朝の暗闇に小雨が降っている。かと言って明日、天候が回復する保証はないので、昼過ぎまで小雨と言う予報を信じて車を走らせた。

数日、晴天が続く様であれば、避難小屋泊で日本百名山の宮之浦岳まで縦走することも可能と思われたが、雨の日、しかもスコールの様に半端なく降られることもある天候を挟んでの山行は、私たちリタイア組夫婦には無理なので、今回は兎も角、縄文杉を目指すことにした。

先ず、宿から荒川登山口を目指す。毎年 3 月から 11 月まで、荒川登山口と屋久杉自然館間のマイカー規制が行われているため、30 分かけて宿から約 11km 先の自然館の登山者用駐車場まで行き、5 時発の登山バスを待つ。バスへの乗車は先着順で、満車になったら次発に回される。何とか始発に乗り、九十九折の林道を約 30 分揺すられて荒川登山口に着いた頃には夜が明けた。宿で作ってもらった朝弁当を食べ、トイレを済ませて、いざ出陣。

登山口の標高は 600m、片道 11km 先の縄文杉(標高 1,280m)までは標準 5 時間の行程だ。

このうち、獲得標高 1,030m、約 2.5km の本格的な登山道の起点となる、途中の大株歩道入口までの登り 310m、距離約 8.1km がトロッコ道歩きである。歩き易い様に、枕木の間には道板が張り詰められている。以前は枕木を頼りに歩いていたそうである。

山の清々しい霊気、木陰の苔の森、二代杉、三代杉(切株から二、三代目の実生が巨大に育ったもの)、美しい渓谷を渡る恐怖の鉄橋、独特なヤマザクラやヤマツツジ(サクラツツジの早咲き?) の可憐な花々、江戸時代から昭和 45 年まで伐採されていた屋久杉(樹齢 1,000 年以上のもの、それ以下は小杉と言う) の巨大な切株とロケーションの変化には事欠かないが、なにせ長くて単調なトロッコ道(片道 2 時間半)の往復は、如何にも疲れて飽きる。

往復 22km、ヤママップでの累積標高 1,790m、所要時間 10 時間の日帰りピストンは、昨年の北アルプス・涸沢カール行き以上の初めての経験である。

トロッコ道を小一時間進むと、小杉谷小中学校跡が見えてくる。小杉谷集落は、大正 13 年に屋久杉の伐採と搬出を生業とする村人のために、もう一つの石塚集落と共に拓かれた最盛期 500 人が暮らした所である。

昭和 45 年の伐採の終了と廃村まで、切り出した屋久杉をディーゼル機関のトラックで運搬していた。その後は土に埋もれた資源としての「土埋木」の運搬が、つい最近の令和まで行われていたとのことである。このトラック、それ以降も実は現役で、今は登山者のための避難小屋やトイレ、登山道の資材などの運搬、緊急時の救護でなおも活躍している。

そうそう「土埋木」であるが、江戸時代に伐採された屋久杉の残材である。

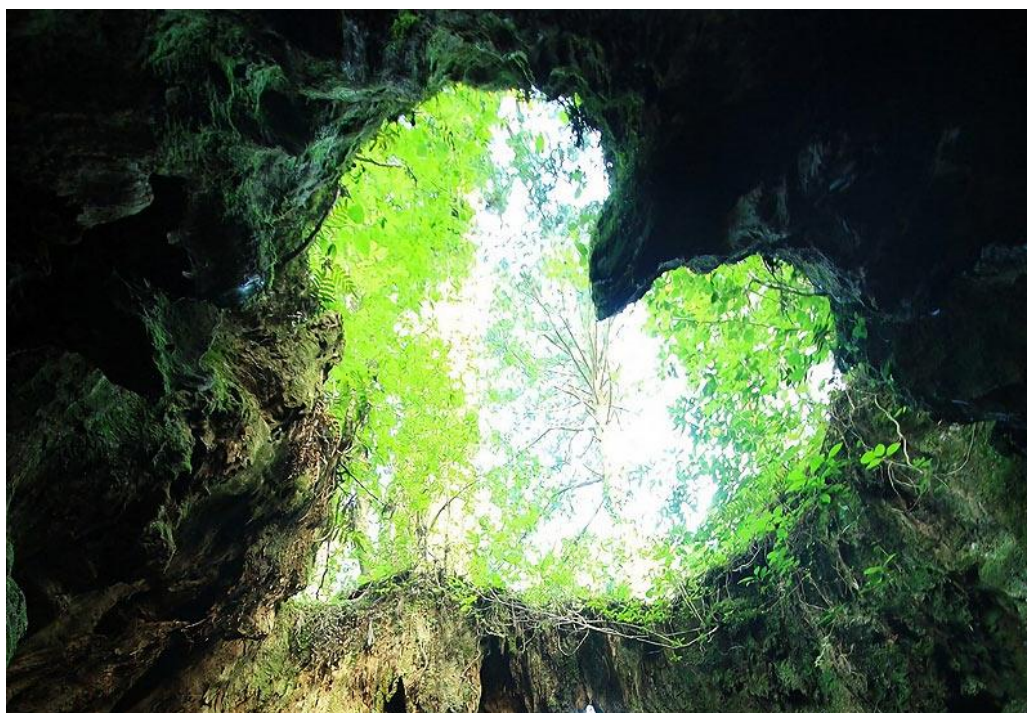
腐りにくい屋久杉は、江戸時代には主に平木(屋根葺き材)用であったため、巨大であっても割り易い木を選んで伐採、現地で製材・加工・製品化できる部分のみを利用し、残りの枝条や幹・根株は、もったいない話だが林内に放置されたのである。屋久杉は樹脂を多量に含んでいるため、200～300 年後の現在でも腐ることなく残って居る。これを土埋木と言う。

かつて土埋木は、島の貴重な天然資源として、採掘、入札による販売が行われ、十年越しの長期乾燥工程を経て、家具や椀、盆、花器、箸など様々な島の工芸品に加工されるのである。数年前に、この土埋木の採取と販売は終えられたが、土産物屋の店主の談によれば、買い溜めて乾燥中の土埋木で、この先何十年か暮らせるとのことである。

トラック道は、さらに小一時間で白谷雲水峡への分岐、楠川分かれを越え、三代杉、仁王杉を辿りもう 1 時間強で大株歩道入り口に到達する。

ここからは、本格的な急登の登山道が始まる。ただ、訪れるハイカーの多さからか、木道、階段が完璧なまでに見事に整備されていて歩き易い。丹沢、塔ノ岳へのバカ尾根ルートの様。

ここからの 2 時間半あまりは、30 分毎に見所の大杉が現れる。まず、倒木により消失した翁杉の株が出現すると、この先に秀吉が切らせたと言う伝説で有名なウイルソン株が見えてくる。祠のあるハート形にくりぬけた巨大な洞は、10 畳間がすっぽりと収まる位の大きさだ。順に並んでお決まりの写真を撮って再スタート。



次の 30 分で、縄文杉発見まで最大と言われていた大王杉の間近かを木道デッキで通過する。その圧倒的な豪放たる姿に、思わず立ち止まり暫し見上げていると、何かを囁かれているようで自然と手を合わせてしまった。この辺から先が世界自然遺産の核心部分である。



大王杉



夫婦杉

さらに 30 分で霧にむせぶ夫婦杉の展望デッキで昼食、最後の 30 分を登りきると念願の縄文杉が見えてくる。朝からの小雨は、まだ降り止まない。体力を著しく消耗して、芍薬甘草湯とアミノバイタルを飲みまくって歩いてきたが、とうとう両腿が攣ってしまった。



縄文杉

幸運にも、これ以上 先には進めないところまでバテた瞬間に、やっとの思いで縄文杉の展望デッキに到達した。デッキは根元保全のため、遥かと言えるほど縄文杉から離れているが、その異様なまでに巨大な幹が霧の中に浮かび上がっている。もの凄いパワーを貰い、マイナスイオンに癒されながら体を休め、ドリームジャンボ当選のお願いをする。

ここまでの往路は、想像以上にハードだった。こんな秘境の奥地だったからこそ、7,200 年もの間、誰にも見つからず樹木界の仙人の様に生き延びて来られたのかも知れない。1,000 年後、もはやこの地球上に人類は存在して居ないかも知れない。それでもこの縄文杉は逞しく強かに生き延びていて欲しい。否、生き延びているに違いない。ふと、そう思った。

縄文杉をもっと長く眺めていたかったが、帰りのバスに間に合わなくなるため、渋々帰路についた。復路も小雨の中、足腰全体にダメージを感じながら、ヨレヨレ、グタグタに疲れ切って下山した。体中が痛む。爺には結構タフだった。

日頃の鍛錬の違いからか、いつもは下山が苦手な妻が、今日は 16 時発のバスを目指して快調なペースで下りて行き、私は数百メートル後ろにおいて行かれた。

それでも、15 時近くなってようやく晴れ間が見えて元気を取り戻し、荒川登山口 17 時発の帰りのバスに乗る頃には黄昏ていた。結局、行動時間は標準タイムの 10 時間である。縄文杉のこと

縄文杉の発見は、1966(昭和 41 年)、屋久町役場の観光課長だった岩川貞次氏により発見され広く紹介された。発見当初は大岩杉と呼ばれた。「縄文杉」という名前の由来は、当時推定された樹齢が 4,000 年以上で縄文時代から生きていることから来たという説と、奔放にうねる幹の造形が縄文土器に似ているからという説があるようだ。

樹齢については諸説あるようだが、屋久杉自然館に展示している「縄文杉いのちの枝」を見学すれば、7,000 年以上にも合点が行く。平成 17 年に台風で折れた小枝が展示されている。小枝と言っても 6 トンダンプの荷台に納める大きさと、重さも何トンもある。縄文杉の全体像からすれば、ほんの小枝に過ぎないが、この小枝の折れた付け根の年輪は 1,000 年だと言う。さらにこの穂先の梢の年輪が 600 年だと言うのである。



屋久杉自然館の展示「縄文杉いのちの枝」

縄文杉 発見当時の新聞記事には、宮之浦岳へと進む登山道から、ほんの数十メートル逸れて分け入ったところに聳えていたと言う様な記述がある。

果たして、本当にこれまで誰にも発見されなかったものであろうか。私には俄かに信じ難い。それは、幾つかの推論からである。

第一に、宮之浦岳は古くから山岳信仰の山であるから、この登山道と登山者の歴史は相当に古い筈だ。だとすれば、これほど登山道に近い巨木が何世紀も発見されずにいたとは想像し難いからだ。

第二に、だとすれば、なぜこの巨木が記録に登場しないのであろうか、それには幾つかの理由があるだろう。一は、江戸時代の技術では伐採・現地加工・搬出が困難な立地にあったのではないかという事。二は、樹形、洞などで用材に適さない樹であったため忘れ去られた可能性だ。しかしながらこの樹は、幹が直立して太いにもかかわらず、材質を確かめた試し切りの形跡が無い様である。然らば三は、畏敬の念である。すなわち、大昔の樵がこの樹を切ろうとして祟られたと言う様な事件があり、神木として祀られずに禁足地として封印されたのではないかという疑いだ。多分に妄想の域を出ないが、ひょっとすると根元を発掘す

れば、石仏、毘沙門天、石塔・石碑の断片などの証が出土するかも知れないと思うのである。

こうした理由で、同じ登山道沿いにありながら、翁杉、大王杉、夫婦杉の様に歴史上の記録に登場しなかったのではないだろうか。そんな妄想に駆られた。

また来るぞ この島

残りの 2 日間は、ヤクスギランドのトレッキングと紀元杉、その他の島内観光や島のグルメを楽しんだ。中でも安房の「フィッシャーマンズバーNINA」の地魚イタリアンが絶品であった。宿の 4 泊も極めて快適でご飯もとても美味かった。がしかし、唯一残念だったのは、4 日目に計画していた白谷雲水峡のトレッキングが、大雨と増水で果たせなかったことである。

この島にはまだまだ魅力がある。宮之浦岳、白谷雲水峡、モッチョム岳、ウミガメの産卵、温泉巡り、それに磯釣り、と 次に行ってみたいところが満載である。

登山も、もう一度鍛え直して、この島を再訪すると決意しつつ、アットホームな宿のオーナー夫妻に別れを告げた。

紀元杉 と屋久杉ランド方面の山脈と溪谷

